

1 はじめに

平成 21 年 (2009 年) は、ガリレオ・ガリレイが望遠鏡を宇宙に向けてから、ちょうど 400 年の節目の年ということで、国連などによって世界天文年 (International Year of Astronomy) と制定され、天文宇宙に関連した話題で世界中で大いに盛り上がりました。わが国では 46 年ぶりの皆既日食も加わり、より一層の盛り上がりを見せたことは、みなさまご記憶のことと思います。京都大学大学院理学研究科附属天文台では、これらに加えて、花山天文台創立 80 周年、さらに 1 年遅れの飛騨天文台創立 40 周年も重なり、「京大天文年」と言っても良いような、イベントづくめの歴史的な 1 年となりました。

まず、5 月 25 日に飛騨天文台創立 40 周年記念式典を、飛騨天文台近くの上宝カントリークラブ&リゾートホテルで開催しました。飛騨天文台が創設されたのは 1968 年ですから、本来は 2008 年に 40 周年記念式典を開催するべきだったのですが、2008 年度には耐震改修工事などもあって延期せざるを得なかったのです。今回その工事修了記念も合わせて、記念式典を開催しました。飛騨天文台は 1968 年に惑星天文台の拠点としてスタートし、ドームレス太陽望遠鏡が完成した 1979 年からは太陽地上観測の国際的拠点の一つとして太陽分光観測で大きな成果をあげてきました。1992 年からは太陽全面 H α 観測を常時行うフレア監視望遠鏡 (FMT) 観測が始まり、モートン波 (衝撃波) の観測などで世界をリードしてきました。(2010 年 3 月には、FMT は地球の裏側のペルーに移設が完了し、太陽全面 H α 観測の国際ネットワーク (CHAIN プロジェクト) がいよいよ本格的に始まりました。) 2003 年には太陽全面 H α 線観測では世界最高分解能を誇る SMART 望遠鏡が完成するなど、宇宙天気予報の基礎となる太陽全面観測でも世界に大きな貢献をしています。2008 年 4 月に一本潔教授が着任し、太陽スペース観測を地上から支援する太陽地上観測の国際的拠点の一つとして、新たな発展のスタートを切ったところです。大変お忙しいところ、わざわざ飛騨の山奥での記念式典にご出席いただきました来賓の方々、とりわけ常日頃から飛騨天文台の運営に色々ご配慮いただき、今回の耐震工事にご尽力いただきました吉川研一理学研究科長、野中定雄理学研究科事務部長をはじめとする理学研究科事務室および本部の皆さま方には、深く感謝したいと思います。

9 月 18 日には、花山天文台創立 80 周年記念式典を京大時計台ホールで開催しました。詳しくは本誌に譲りますが、記念講演会では 3.8m 光学赤外線望遠鏡計画をご支援いただいている藤原洋さん (インターネット総合研究所および (株) ナノオプトニクス・エナジー代表取締役)、ペルーの天文学のパイオニアとなられた石塚睦博士を引き継いで、ペルーの天文学を牽引されているイシツカ・ホセ博士 (石塚睦博士のご子息) が大変興味深い講演をしてくださいました。石塚睦博士が健康上の理由でご出席できなかったのは大変残念でしたが、イシツカ博士が石塚睦博士からのメッセージを感動的に伝えてくださいました。上述しましたフレア監視望遠鏡 (FMT) が首尾よくペルー・イカ大学に移設が出来ましたのも、お二人の多大なご尽力のおかげです。石塚睦博士とイシツカ・ホセ博士には厚くお礼申しあげます。また、藤原洋さんには、いつもながら望遠鏡建設への多大なるご支援、再度、深く感謝申し上げる次第です。記念式典や記念パーティでは、松本紘京大総長、観山正見国立天文台長をはじめとする来賓の方々、それぞれ大変個性的な心のこもった応援スピーチをしてくださり、附属天文台教職員一堂、感激の瞬間でした。ご多忙の折、ご出席いただきました皆さま方には、あらためて心よりお礼申し上げます。

附属天文台の構成員数は、2009年4月で、教員6人(花山3人、飛騨3人)、技術職員2人(飛騨2人)、研究員(PD)6人(花山5人、飛騨1人)、非常勤職員12人(分室1人、花山4人、飛騨7人)、大学院生15人(博士10人、修士5人)、これに花山天文台に研究室を持つ宇宙ユニット教員1人を加えると、総数42人となっています。2009年度1年間に出版された論文は51編(うち査読雑誌論文24編、集録論文27編)、研究発表149編(国内研究会・学会117編、国際会議32編(うち招待講演10編))、となっており、研究活動はきわめて活発です。また、2009年度内に提出され合格した博士論文は3編、修士論文は2編と、教育面でも大きな貢献をしています。

2009年度は世界天文年ということもあって、花山・飛騨天文台の一般公開やNPO観望会をはじめとするアウトリーチ活動はきわめて活発でした。7月の七夕の週には、天文学会と天文教育普及研究会の共催により、「世界天文年全国同時七夕講演会」という催し物が全国で開催されました。これには附属天文台教職員が中心的役割を果たしました。

学術創成研究「宇宙天気予報の基礎研究」(2005-2009、代表：柴田一成)は、5年目のまとめの年を迎えました。ひので衛星などの太陽観測に基づいて太陽フレア、コロナ質量放出を再現し、さらにそれから太陽風擾乱、地球磁気圏擾乱(磁気嵐)を再現(予報)するという(数値的)宇宙天気予報の基礎が、まだ100%ではありませんが、ほぼ出来上がってきたと言えます。また本プロジェクトにより、我が国の太陽分野と地球分野の研究者の交流が進んだのは大きな成果でした。

2009年には附属天文台関係者による賞の授賞という嬉しい出来ごとが3件もありました。まず、私(柴田)が文部科学省科学技術政策研究所より、「宇宙天気予報の基礎となる太陽活動の解明への貢献」という理由により「ナイスステップな研究者2009」に選ばれるという栄誉をいただきました。さらに、大学院生の西塚直人さん他が、京都大学総合博物館学術映像博2009において、『「ひので」で観測した太陽と電磁流体シミュレーション』という作品により、学術映像コンペティション学術映像優秀賞を受賞しました。最後に、大学院生の渡邊皓子さんが「黒点暗部微細構造に関する観測的研究」により、第2回京都大学優秀女性研究者賞(たちばな賞)の学生部門賞を受賞しました。このような栄誉をいただけましたのも、皆さまの日頃からのご支援のおかげです。ここにあらためて関係の皆さま方に深く感謝申し上げたいと思います。

平成23年(2011年)1月24日
京都大学大学院理学研究科
附属天文台台長 柴田一成